

に入りしは、明末に在り。彼等の喇嘛廟たる氈幕を一見するに、其の廟内に安置せる佛像は、西藏拉薩府の製作に係るものにして、彫刻精巧を極め、裝飾は金銀珠玉を鏤めて、實に美觀を呈す。又佛畫の軸物も、古雅精妙のもの少なからず。喇嘛の服装は、袍子袈裟を着し、僧帽を冠す。衣帽の色は、老者は黄色を、年少者は紅色を用ゆ。廟内には晝夜共に夥多の油燈を點し、十數人の喇嘛左右に羅列して、鼓を打ち鐘を鳴らし、讀經回向する様、恰も我國の寺院に於けると大同小異なり。

喇嘛黃教の教理は、龍樹の唱道したる神秘幽玄の密教を骨子とし、深く見性度生を重んじ、聲聞小乘及幻術の下乘を斥け、以て純粹なる大乘佛教の眞理を酌み、深遠なる一種の教理を組織したるものにして、殆んど我國の眞言密教に彷彿たる所ありと言ふ。

彼等喇嘛教徒の平素唱ふるは、『唵エン嘛マ呢ニ叭バ嘯ド吽ウ』の六語なりとす。即ち是れ佛語にて、『冀ふ所他なし、蓮華上の寶座』と云ふ義なりと。此の語は喇嘛及信徒の最も尊重する所にして、恰も我國佛教信者が、『南無阿彌陀佛』の六字を唱ふると同じく、男女老若を問はず、常に之を唱ふるのみならず、到る處、岩頭樹梢或は墻壁、石碑、其他